

## 詩篇112篇

《幸いなるかな》

1 ハレルヤ。幸いなことよ。主を恐れ、その仰せを大いに喜ぶ人は。

《幸いな家族》

2 その人の子孫は地上で力ある者となり、直ぐな人たちの世代は祝福されよう。

3 繁栄と富とはその家があり、彼の義は永遠に堅く立つ。

4 主は直ぐな人たちのために、光をやみの中に輝かす。主は情け深く、あわれみ深く、正しくあられる。

《社会との幸いな関係》

5 しあわせなことよ。情け深く、人には貸し、自分のことを公正に取り行う人は。

6 彼は決してゆるがされない。正しい者はとこしえに覚えられる。

7 その人は悪い知らせを恐れず、主に信頼して、その心はゆるがない。

8 その心は堅固で、恐れることなく、自分の敵をものともしないまでになる。

9 彼は貧しい人々に惜しみなく分け与えた。彼の義は永遠に堅く立つ。その角は栄光のうちに高く上げられる。

10 悪者はそれを見ていらだち、歯ぎしりして溶け去る。悪者の願いは滅びうせる。

ハレルヤ詩篇の第二。111 篇と 112 篇は「対の詩篇」と呼ばれ、兄弟か姉妹のような関係にあります。どちらも「いろは歌」となっており、ヘブル語のアルファベット順に文頭の文字が並べられています。中心的なメッセージには以下のような違いがあります。

111 篇：神の御業

112 篇：神の人の業

本篇は 111 篇と並んで捕囚との関わりが強く、帰国後の貧さの中で歌われたものであろうと考えられています。

1 節冒頭で「幸い」が呈示される場所に、詩篇 1 篇と同じ響きを感じます。どのような人が幸いなのか。それは、「主を恐れ、その仰せを大いに喜ぶ人」であると。旧約では特に、律法を守ることが重要視されましたが、ここでは律法を「喜ぶ」という素敵な表現になっています。主の教えを喜び、昼も夜も口ずさむ人のことが言われているのでしよう (1:2)。

2～4節では「子孫」「世代」「家」という表現が連なり、家族単位の祝福へと広がります。家長が主を畏れその教えを喜んで生きていると、子々孫々にまで祝福が及んでいくというのです。「地上で力ある者となる」「繁栄と富」などと聞きますと、権力や経済的豊かさばかりがイメージされやすいかもしれませんが、本篇ではむしろ、その富を惜しみなく分け与えるところにこそ焦点が当てられています。

「情け深く、人には貸し、自分のことを公正に取り行う」（5節）、「彼は貧しい人々に惜しみなく分け与えた」（9節）。この「神の人」が持つ性質について、「直ぐな人たちのために、光をやみの中に輝かす」「情け深く、あわれみ深く、正しく」と言われています。新改訳では「主は」という主語が付けられていますが、原文にはなく、その人の人格そのものを言い表していると思えてもよいでしょう。しかし、それがどこから出ているかといえば、やはり「主の御教え」からなのです。彼がいつも口ずさんでいる御教えが、彼の生き方を形成しているのです。彼は富に執着しておらず、困っている人を見るとジッとではおられない。主が自分に与えてくださったものを賢明に用いられたことを喜んでいっているのです。人は与えるところにこそ喜びを覚えるということ、この人はよく知っていました。

この「幸いな人」にもたらされる祝福がいろんな角度から言い表されています。「彼は決してゆるがされない」「とこしえに覚えられる」（6節）、「悪い知らせを恐れず」「その心はゆるがない」（7節）、「その心は堅固」「恐れることなく」「自分の敵をものともしない」（8節）。このように言葉を拾い上げてみると、詩人は「心の安定」を大切にしているということに気づかされます。主に聞き従う人の生き方はグラグラとせず、岩の上に建てた家のように動かされることのないのです。生き方がどっしりとしており、自分本位でない懐の深さがある。

10節は「結び」となりますが、「悪者」の末路について語られて終わることが少々気になります。もっと明るい終え方でもよかったのではないかな。いえいえ、念のため「悪者」の心理を振り返ってみましょう。心に悪しき事を抱く者は、本篇の「神の人」の生き方が理解できないのです。権力を持てる状況であるはずなのに、なぜそれを求めないのか。高利貸しできそうなものを、なぜ利子すら取らないのか。私利私欲を求める人には、「神の人」の気前良さがどうしても理解できず、その堂々たる姿に恐れを抱くでしょう。10節の「願い」という言葉は「欲望」的な意味を持ち、人の欲望は決して愛には勝てないことを伝えています。